

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 23 日現在

機関番号：32408

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25760008

研究課題名(和文)重層的差異を生きるフィリピンのイスラーム改宗女性：つながりとジェンダーの動態から

研究課題名(英文)Filipino Converts to Islam in Multi-Layered Differences: Dynamism of Relatedness and Gender

研究代表者

渡邊 暁子(Watanabe, Akiko)

文教大学・国際学部・講師

研究者番号：70553684

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、イスラームに改宗したフィリピン人女性の事例から、改宗が単なる個人の信条や教義の受容ではなく、社会の主流派から少数派への転換、汎アラブ的価値観の受容、民族間のダイナミクスへの包摂等、個人が重層的な力関係に置かれることを試みた。この関係は、フィリピンの歴史および西欧メディアを発祥とするイスラームに対するイメージや、エスニシティ/ナショナルティのパワー・バランスによって影響を受けるものであり、宗教や地域的親和性などの経済的要因以外にも、結合を引き起こす要因があるという点を明らかにした。また、改宗者により、フィリピン・ムスリムというエスニック境界が問い直されている点も指摘した。

研究成果の概要(英文)：The study aimed to understand the implication of Filipino women's embracing Islam by recognizing the conversion as merely personal acceptance of faith and doctrine, but transformation of the individual from the social majority to minority, recipience of pan-Arabic values, and inclusion in inter-ethnic dynamism, and locating them in the complex and multi-layered power relationships. The study elucidated that the relationships were influenced by images created in the Philippines historically and the Western media on Islam and Muslim, and power balance of ethnicity/nationality. Moreover, not only economic factors such as religious and local affinity, but also other factors of relatedness did affect these relationships. In addition, the study pointed out that the children of intermarriage converted women had roles of variation of ethnic identities, and led to reconsideration of ethnic boundaries in the Philippine Muslim society.

研究分野：地域研究

キーワード：フィリピン 女性 イスラーム 改宗 パワー・バランス 重層的差異

1. 研究開始当初の背景

フィリピン人女性は、国内のイスラーム教徒との結婚、湾岸アラブ諸国への国際労働力移動やそこでの外国人ムスリムとの結婚によってイスラームに改宗してきた。こうした女性たちは、フィリピン内外の社会において重層的な布置にあり、多様なアクターの複合的な力関係に取り込まれている。彼女たちをとり扱う本研究の当初の分析視座は、大きく以下の3つに分けられた。それぞれの学術的背景を説明する。

論点 I : フィリピンにおけるイスラーム改宗女性の位置づけの重層性

従来、ムスリムが多くを占める南部フィリピンにおいて、イスラーム勢力は、分離独立のために中央政府と武力衝突を続けるなど、人口の圧倒的マジョリティを占めるキリスト教徒との敵対的関係を継続させてきた。こうしたフィリピンをホームランドとしながら、キリスト教徒からイスラームに改宗することは、主流派から少数派への転換だけでなく、アラブ人を頂点とするグローバルなイスラーム世界構造への包摂の過程でもある。パキスタン人男性と結婚しムスリムに改宗する日本人女性に焦点を当てた工藤(2008)もまた、自国においてマジョリティからマイノリティへと「越境」する過程を描いたが、イスラーム世界との力関係については断片的に捉えたにすぎない。ホームランドにおける個人の宗教的転換は、階層的なムスリム世界への包摂をはじめとして、当事者をどのように新たな重層的力関係に取り込んでいったのか。この過程についての研究が求められる。

論点 II : イスラーム世界、フィリピン社会におけるエスニック・パワー・バランス

論点 I に見られるような重層的力関係は、今日のイスラーム改宗者の結婚が、もはやかつてのような経済要因を中心とする国際上昇婚(Constance 2005)だけでは捉えきれないことを示している。そこには、国家間経済規模を補完するものとして、経済的要因以外の要素が、人々の結合の要因となっているのではないかという視点が生まれてくる。その要因のひとつが、ムスリムの階層イメージといった、イスラーム世界の価値観に基づく、ナショナリティやエスニシティのパワー・バランスなのではないだろうか。このため、民族ムスリムを中心とするフィリピン・ムスリム社会構造を踏まえ、イスラーム改宗者女性たちの配偶者がもたらすパワー・バランスの錯綜性が解明される必要がある。

論点 III : フィリピン・ムスリム社会におけるエスニック・バウンダリーに関する論点

イスラーム改宗女性がフィリピン・ムスリム民族の男性と、もしくは外国人ムスリムと新たに家族を形成する際、その子どもたちの

分析から明らかになるのは、エスニックもしくはナショナル・バウンダリーの在り様である。フィリピン・ムスリムを構成する13の民族集団に属さないイスラーム改宗者の子は、フィリピン・ムスリム社会からみると「ハーフ」もしくは「メスティソ」と呼ばれており、かれらはフィリピン・ムスリム「民族」の境界を相対化し、動態的な民族=文化理論の構築において一端を担っている。イスラーム改宗者の家族の微細な関係をみることで、そうした動態的なエスニック・バウンダリーの在り様が明らかになるだろう。

2. 研究の目的

研究代表者は過去の調査研究を通じて、グローバルなムスリム・ネットワークとマニラにおけるムスリム・コミュニティ形成との関連、ムスリムとキリスト教徒との日常的な交渉や関係、都市マイノリティとしてのムスリムの自己表象の戦略などを、フィリピン国家をとりまくマクロな社会経済状況の変化との相互作用のなかで分析してきた。そのなかで、ムスリム・コミュニティの外に暮らすイスラーム改宗者の存在も確認してきた。彼/女らは、ムスリム民族が多数派を占めるコミュニティにて生活するのではなく、各自の空間的生活領域を形成していた。そうした人びとは、フィリピンを取り巻くグローバルな経済と無関係ではない。

フィリピンは、1970年代に始まった労働力輸出政策により、世界諸国、とりわけ最も労働力供給された湾岸アラブ諸国と結びついた。滞在が長期化する中で、移動労働者の一部には、渡航先で宗教的な模索を始めてイスラームに改宗したり、同様の労働環境にある外国人ムスリム男性と結婚することによって改宗したりする女性の姿が顕著になっている。

そこで、本研究では、研究期間内に、以下3点を明らかにしようと試みた。

(1) イスラームに改宗したフィリピン人女性の事例から、改宗が単なる個人の信条や教義の受容ではなく、個人を、社会の主流派から少数派への転換、汎アラブ的価値観の受容、民族間のダイナミクスへの包摂等の、複雑で重層的な力関係に位置づけていく過程でもあるという点。

(2) 上述の複雑で重層的な力関係は、イメージや、エスニシティ/ナショナリティの関係性(パワー・バランス)によって影響を受けるものであり、宗教や地域的親和性などの経済的要因以外にも、結合を引き起こす要因があるという点。

(3) イスラーム改宗者の子どもの存在は、エスニック・アイデンティティの多様化を引き起こし、フィリピン・ムスリムというエスニック・バウンダリーの在り方が問い直されているという点。

本研究の意義として、次の点が挙げられる。

まず、フィリピンのイスラーム改宗女性を扱ったこれまでの研究は、研究を開始した当時、一夫多妻制に関する改宗女性の理解を論じたものだけであった (Pula 2004)。これに対し、多様な差異を生きるイスラーム改宗女性のつながりとジェンダーの動態を、現地調査をつうじて考察しようとする本研究の試みは、国内の研究動向からみて先駆的な研究であった。

次に、近年、西洋諸国でのムスリム人口の増加が社会的に注目されており、それによりイスラームに改宗する女性を対象とした研究がなされてきた (van Nieuwkerk 2006 ほか)。これに対し、本研究は、イスラーム世界の辺境とみなされているフィリピンにおいて、イスラームへの改宗をとおして、様々な差異を生き、バウンダリーを越えるムスリム女性の姿を描き出した。

最後に、本研究において、イスラーム改宗女性の生きざまを考察することで、今日のフィリピン・ムスリム社会、ひいては同様の文化的背景をもつ東南アジアのイスラーム社会の理解をめざすものとした。また、イスラーム改宗女性からみるフィリピン・ムスリム社会の複合的構造を明らかにすることによって、同社会におけるジェンダー変容の今後の展望を得ることができた。

3. 研究の方法

研究代表者は、フィリピンにおける調査研究 (2ヶ月)、ドバイ首長国とカタール首長国の湾岸アラブ諸国における調査研究・研究交流 (1ヶ月)、そして日本における調査研究・研究交流等 (2年半強) をおこなった。

このうちフィリピンにおいては、研究代表者がこれまで研究を進めてきたマニラ首都圏とその近郊を中心に、現地調査を実施した。調査方法は、ムスリム・コミュニティへの訪問と直接観察、イスラーム改宗者女性とのグループディスカッション、および個別の改宗者女性へのタガログ語による聞き取りの2つの3手法をもちいた。

フィリピンでの調査においては、各年度に異なるサブテーマを設定して調査を実施した。2013年度には、研究計画(): フィリピンにおけるイスラーム改宗女性の位置づけの重層性に関する研究をおこなった。改宗によって、女性たちが、社会の主流派から少数派への転換、汎アラブ的価値観の受容、民族間のダイナミクスへの包摂等の、複雑で重層的な力関係に位置づけられていく過程を追った。2014年度には、研究計画(): イスラーム世界、フィリピン社会におけるエスニック・パワー・バランスに係る論点の研究をおこなった。2015年度には、研究計画(): エスニック・バウンダリーに関する研究を実施した。

現地調査では、ムスリム女性研究専門家であるフィリピン大学イスラーム学研究科の M. モラド教授や、C. アブバカル教授、イス

ラーム改宗女性の支援団体の事務局長である A. ギアマト氏などとの学術的ネットワークの支援を仰いだ。また、ドバイ首長国とカタール首長国のフィリピン人ムスリム・コミュニティにおいても、2009年以來、調査研究活動を続けてきたことで、円滑な調査が可能となった。

国内調査では、アジア経済研究所、東京外国語大学、東南アジア研究所、京都大学大学院アジア・アフリカ・地域研究研究科図書室において、フィリピンおよび東南アジアのムスリム社会における民族誌やジェンダー、イスラームに関する文献資料の収集をおこなった。これにより、フィリピン、UAE、およびカタールでの現地調査において得られたデータを跡付けた。

研究代表者は、これらの調査内容をまとめ、国内外の学会等で報告し、年に1~2本ずつ論文として執筆してきた。2015年度以降には、調査地への研究成果還元のため、英語で著作を刊行する準備をおこないたい。

4. 研究成果

上述した具体的な研究計画について、それぞれの研究成果を記す。

(1) フィリピンにおけるイスラーム改宗女性の位置づけの重層性

第1に、女性の改宗時期により、イスラーム実践および他者関係について異なる傾向があることがわかった。1990年代以前は、ミンダナオ紛争によりフィリピン国内のキリスト教徒社会でムスリムに対し嫌悪感を強く持つ者が多かったことと、中東湾岸地域への女性出稼ぎ労働者が少なかったことから、改宗者とは主にムスリム男性の妻というポジションを得て、フィリピン・ムスリム社会に溶け込もうとする動きが主だった。そのため、民族衣装を着用しつつも、そのイスラーム実践は夫や夫の親族の教えによって習得したものであった。

一方、1990年代以後については、女性の出稼ぎ労働者の低年齢化と、湾岸アラブ諸国でのイスラームとの接触の増加によって、自ら改宗し、さらに湾岸アラブ諸国のムスリム文化を服装や思考、実践に持ち込んだ。これに付随して、フィリピンの生まれながらの民族ムスリム (以降、「生来のムスリム Born Muslim」と表記) の女性たちは、湾岸アラブ諸国から持ち込み、より真摯にイスラームを実践する女性たちを、ホームランドのミンダナオでは忌避しつつも、マニラのような都市では、新鮮なものとして捉えるようになってきていることがわかった。

第2に、そうであるとはいえ、こんにち、フィリピンにおいて、改宗者女性らが自身と家族が住まうコミュニティを選ぶ際、生来のムスリムが多く居住するところではなく、改宗者たちだけが暮らすコミュニティを選定する者が少なからずいる。

これには、2つの側面が挙げられる。ひとつは主流社会との関係である。改宗者は生来のムスリムに対する主流社会からのイメージを回避したい意向がある。生来のムスリムは、これまで「テロリスト」や「犯罪者」といった偏見や蔑視を受けてきており、出自が異なる改宗者たちは、そうした点で彼らと自分たちが同一視されるのを敬遠した。もちろん、麻薬・銃器・違法DVDの売買に従事する貧困層の生来のムスリム人の暮らしに巻き込まれたくないという思いに起因するものでもあった。

もうひとつは、生来のムスリムとの関係である。改宗者と生来のムスリムが同じ空間で暮らすと、コミュニティ内では政治的・宗教的リーダーシップをめぐる争いがみられてきた。改宗者は、自らが改宗した湾岸アラブ諸国におけるイスラームの実践に強い愛着を感じ、その実践に誇りを持つ。彼らにとって、生来のムスリムによるイスラーム実践は不十分であるが、この点の是正を主張すると、生来のムスリムとの関係が不穏になることは必至であった。

この関係は、改宗者の出自にも起因する。生来のムスリムは、改宗者が以前キリスト教徒だったことから彼らを「元ピサヤ *bisaya*、(文字通り、ピサヤ諸島に住む人々を示し、転じてキリスト教徒を意味する)」と呼び、生来のムスリムの王族のように出自を系図(*tarsila*)を通じて辿ることができないため、より劣位にあると考える。この認識は、キリスト教徒がイスラームに改宗した後でも容易に解消されず偏見だけが残るのである。ゆえに、改宗女性においては、イスラーム世界において「遅れてきたムスリム」として、できるだけ真摯に学びを深めていくのである。

(2) イスラーム世界、フィリピン社会におけるエスニック・パワー・バランス

改宗者女性のイスラーム実践と他者関係については、連関性と多様性があることがわかった。

まず、フィリピンにおけるイスラーム改宗者の住まうムスリム・コミュニティに、イスラーム実践の程度の違いが見られた。そこには、外部のキリスト教徒主流社会との関係をほとんど断ち、外出の際には女性が黒い手袋・靴下・アバヤ(体のラインが出ない外套)・ニカブ(目の部分だけを露わにした服装)を着けることを強く勧める「ワッハーブ派」の教義を順守するコミュニティがある一方、頭部にスカーフだけをつけて・長ズボンとカジュアルな格好をする女性がいるコミュニティもあった。

女性たちの実践するイスラームの教義が排他的であればあるほど、家族や親族、改宗前の友人関係、職場が限定されていた。イスラームを選択することで、ビジネス関係が解消されたり、職を解雇されたりする者も数多い。ゆえに類似の境遇にいる者同士の狭い範

囲のなかで、相互扶助がおこなわれるのであった。

研究代表者は、改宗によって、女性たちが、社会の主流派から少数派への転換、汎アラブ的価値観の受容、民族間のダイナミクスへの包摂などの、複雑で重層的な力関係に位置付けられていくことを理解するために、ひとつの改宗者コミュニティに焦点を当てた。この改宗者コミュニティは、1970年代よりフィリピン政府が中東湾岸諸国への国際労働力移動を推進することがなければ設立・継続されなかった。コミュニティの区画はサウジアラビアで働くフィリピン人イスラーム改宗者と、フィリピン・ムスリムの事情を知ったサウジアラビア人の慈善家の寄付で設立された。

2013年12月時点で、家族用賃室に居住する世帯は、ほぼ夫が海外のムスリム国(主に湾岸アラブ諸国)で働く妻子であった。夫が就労のために不在であるぶん、妻はより慎ましく、貞節を守らなければならない。コミュニティの治安と礼節を維持するためにも、区画内の女性はアバヤとニカブの着用がほぼ義務付けられていた。区画内のイスラーム系学校にかよう子供たちを世話し、夫の留守をことが彼女たちの役目であった。

フィリピンの気候からして、手足や頭も含め全身を黒く覆う服装は周囲からは奇異に映る。その様相から主流社会から「ニンジャ」と揶揄されることもしばしばである。その服装をくずさないでいることは、地域の非ムスリムから他者化され、攻撃的な応対を受けることもあった。これに対して、彼女たちは反撃せず、忍耐強くかつ毅然とした態度で応答した。そのための信仰心を強めるため、成人女性へのマドラサ(イスラーム塾)が運営されている。

一方で、改宗女性たちの服装の維持とイスラームへの学びへの姿勢は、近隣の生来のムスリムの尊敬を集めることにもつながっていた。習俗が多い生来のムスリムと比べ、「ワッハーブ」的服装の実践をする彼女たちは預言者ムハンマドの文化を踏襲する「アラブのムスリム」の文化に従っているため、彼女たちは自分たちよりも優れていると考える生来のムスリムもいたのである。

なお、イスラーム改宗女性たちの多くは、経済的・社会的なトラブルを抱えた後に改宗している。特に経済的困窮の場合は、国内のイスラーム教徒だけに認められた一夫多妻婚によって、窮状から「救われた」ケースが多いことも分かった。

(3) フィリピン・ムスリム社会におけるエスニック・バウンダリー

上でも述べたように、生来のムスリムは13の言語民族集団から成る。マニラには、こうした生来のムスリム同士の民族間結婚、あるいはイスラーム改宗者と生来のムスリムとの異教徒間結婚をした家族も増えている。そ

の後、第2世代、第3世代が誕生し、マニラにおける居住期間の長さやホームランドへの意識への薄らぎによって、かれらは自分たちをマニラ・ムスリムと呼び始めている。こうした動きの背景に、民族という境界のゆらぎにみることでできよう。第2世代、第3世代が自らを表現するためにもちいる「ミックス」、「ハーフ」、「メスティソ」という語は、みな「ピュア（生粋）」に反するものとして使われている。「ピュア」とは、まさに両親が生来のムスリム、もしくは、双方が特定の民族集団に属することを指す。生来のムスリム社会のなかには、民族内婚を特に好み、成員の純血性が上位にあると考え、そうでない人びとはより劣位にあると捉えてきた集団もいる。このため、改宗者女性は、当該民族集団の夫の親族に対し、自身とその子供たちの異質な出自について不可視化することで、自分たちの正統性を認めさせようとしてきた。一方で、マニラでは、ムスリムは自分の職場や学校でキリスト教徒と一緒に過ごすため、主流社会に沿った柔軟な服装と行動が求められる。ゆえに、第2世代、第3世代の子どもたちは、自らを「ハーフ」「ミックス」「メスティソ」と名乗ることで、双方の文化を継承する存在と積極的に認める傾向にある。このように、彼らはマジョリティのキリスト教主流社会とマイノリティのフィリピン・ムスリム社会との間の橋渡しの役割を担っていることに誇りを持っていた。

なお、近年、「ミックス」、「ハーフ」、「メスティソ」と名乗るのではなく、「ただのムスリム（just Muslim）」として自己表現する第2世代、第3世代も現れてきた。そこには、民族性を超え、世界的なイスラーム共同体の成員であることにアイデンティティを見出している姿がうかがえる。状況に応じてムスリムであることを主張して連帯を築き、互いの親族、学校、職場での関係を活用している人びとの営みがみられていた。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計2件)

渡邊暁子、フィリピンのイスラーム教徒にみる配偶者選択の展開 世代間の連続性と多様性、比較家族史研究、査読有、31号、2017年、掲載決定。

渡邊暁子、イスラーム世界と人びとの移動から地域研究を考える イスラーム改宗者とフィリピン・ムスリム社会の再編、地域研究、査読有、14巻1号、2014年、194-213。

〔学会発表〕(計5件)

渡邊暁子、フィリピンにおけるムスリムの結婚に関する現代的展開 多様性と連続性、比較家族史学会第59回春季研究大

会、2016年6月18日～19日、「近畿大学（大阪府・大阪市）」。

Akiko Watanabe、Balik-Islam Communities: Reconfiguring Philippine Muslim Society in the International Labor Migration, ICAS 9、2015年7月5日～7月9日、「アデレード（オーストラリア）」。

渡邊暁子、フィリピン人イスラーム改宗女性にみる親密なつながりの変容、第49回日本文化人類学研究大会、2015年5月30日～31日、「国際交流センター（大阪府・大阪市）」。

Akiko Watanabe、Reconfiguring Philippine Muslim Society: International Labor Migration and Emergence of Communities of Converts to Islam、Muslim Minority in East Asia、2015年4月11日～4月13日、「ドーハ（カタール）」。

Akiko Watanabe、Asian Muslim Labor Movement and the Development of Muslim Communities in the 20th Century Philippines、Annual Conference of AAS 2015、2015年3月26日～3月29日、「シカゴ（アメリカ合衆国）」。

〔図書〕(計4件)

Kobayashi, Yuka, Jikon Lai, Samer El-Karanshawy、Oxford University Press、Muslim Minority in North- and South-east Asia、印刷中。

大野拓司・鈴木伸隆・日下渉、明石書店、フィリピンを知るための63章、掲載決定。

Khatharya Um and Sofia Gaspar、Sussex Academic Press、Southeast Asian Migration: People on the Move In Search of Work, Refuge and Belonging、2015年、全230ページ、92-113。

細田尚美、明石書店、湾岸アラブ諸国の外国人労働者 「多外国人国家」の出現と生活実態、2015年、206-228。

6. 研究組織

(1)研究代表者

渡邊 暁子 (WATANABE, Akiko)

文教大学・国際学部・講師

研究者番号：70553684

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし